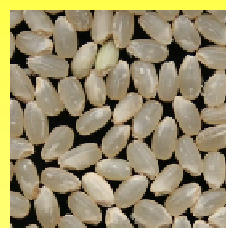


今から備える!水稻の高温対策

令和7年は、6月後半から9月の気温が平年を上回る日が多く、令和6年に続き、高温障害の発生が問題となりました。令和8年も、夏場は平年よりも高温となることが見込まれており、農作物全般への影響が懸念されています。

そこで、これからできる水稻での対策を次のとおりまとめました。良質な米が少しでも多くとれるよう、これらの対策を実施することで、被害を軽減するようにしましょう。



被害の出やすい条件

水稻は、出穂後20日間で高温で経過すると障害を受けやすくなります。また、表のとおり様々な品質低下の発生要因があり、これらの条件をできるだけ回避することが必要となります。



白未熟粒



胴割粒

表 高温による米の品質低下の原因

障害	発生要因
白未熟粒	・ 出穂後20日間の気温が高い ・ 総粒数(1株に着く粒)が多い ・ 出穂後の日照不足、稲の栄養不足
胴割粒	・ 出穂後10日間の最高気温が高い ・ 出穂後の稲の栄養不足 ・ 早期落水、刈り遅れ ・ 高水分粒の高温乾燥

※白未熟粒・胴割れ粒写真は農林水産省HP掲載写真使用

以下の点に注意して対策を行い、高温による品質低下を防ぎましょう!

根傷みさせず丈夫な稲づくり

活着後、分げつ期間中は浅水で管理します。

湛水状態が続くと、ガスや有機酸等の発生で根が傷み、稲が弱る場合があるため、ガスが発生している場合は、定期的に水を入れ替え、根に酸素を供給しましょう。

中干しで過剰な穂数・粒数を制限

目標とする穂数の8割程度が確保できた時点から、「間断かんがい」から始め、幼穂形成期まで田面にヒビが入る程度中干しします。中干し終了後も、根に急激な変化を与えないよう、2〜3回間断かんがいをしてから湛水します。

後半の肥料切れ防止 (穂肥施用の場合のみ)

穂肥は品種に応じた適切な時期に、葉色を確認しながら適量を施用しましょう。



ほ場内水温・地温を下げる (特に出穂後20日間!)

「かけ流しかんがい」が効果が高いが、用水の確保が困難であれば、「間断かんがい(足跡に水がたまっている程度まで自然落水し、気温が下がる夕方以降に入水することを繰り返す)」などで、可能なかぎり水を少しずつ入れ替え、根の活性を保ちましょう。

早すぎる落水はしない

落水は、圃場条件を考慮しながら適期に行います(目安:早期⇒出穂後25〜28日頃、普通期⇒出穂後30日頃)。

落水後、晴天が続き土が乾燥すぎる場合は、走り水で水分を補給します。

適期収穫で刈り遅れ防止

粒の黄化率(緑が抜けた粒の割合)が85〜90%になった頃を目標に、刈り取ります。ただし、高温条件下では成熟が早まるため、早め(粒の黄化率80%)に刈り取りを開始するようにします。

適切な乾燥調製

収穫後は生粒を長時間放置せず、速やかに乾燥作業に入ります。

また、乾燥作業の際は、高温乾燥や急激な乾燥は避け、玄米水分14.5%を目標に仕上げるようにしましょう。

